

認め、精査にて下部胆管癌と診断され当科受診した。PTCDチューブにより減黄を図った後、SSPPDを施行した。術後ドレーンAMYは低値であったがCT上、膵管ステントの膵管内迷入と多量の腹水を認め、膵液瘻と診断し保存的治療を開始した。しかし、全身状態の改善を認めず28POD膵空腸再吻合術を施行。膵管チューブは拳上空腸を通し完全外瘻とした。

術後経過は良好であり膵管チューブ抜去後も問題は認めていない。PD後の膵液瘻に対する再吻合術は手術に困難を極めるが、症例によっては選択可能な治療法の一つと考える。

17 当院における膵頭十二指腸切除術の手術成績～高齢者への適応を検討する～

宗岡 悠介・北見 智恵・新国 恵也
河内 保之・西村 淳・牧野 成人
川原聖佳子

長岡中央総合病院 外科

近年の社会の高齢化傾向に伴い、膵頭部領域癌症例の年齢も上昇してきている。

今回当院における膵頭十二指腸切除術(Pancreatoduodenectomy, PD)症例について年齢別に検討したので報告する。2005年1月から2010年12月に膵頭部領域癌に対して行われたPD症例121例を対象とし、70歳未満、70-79歳、80歳以上の3群に分け比較検討した。70-79歳、80歳以上で術前併存疾患を有する率が高率で、特に心血管系疾患保有率が有意に高かった。術後入院期間、術後合併症発生率、生存曲線に3群間で有意差はなかったが、80歳以上で食事摂取不良、胃排泄遅延などの食事関連合併症が多い傾向にあった。80歳以上では認知症の悪化1例(5.6%)、PS低下2例(11.1%)を認めたが、心筋梗塞で失った1例を除き全例歩いて在宅復帰した。術前併存疾患合併率は高いものの、術後合併症、入院期間に差はなく、高齢者においてもPDは許容できる治療と考えられた。しかしADL、QOLの低下をきたす症例もあり、手術治療を選

択するにあたり、患者本人の意思と家族のサポートが必須であると考ええる。

18 胃癌同時性肝転移に対する切除の意義について

會澤 雅樹・梨本 篤・藪崎 裕
松木 淳・金子 耕司・神林智寿子
丸山 聡・野村 達也・中川 悟
瀧井 康公・佐藤 信昭・土屋 嘉昭

県立がんセンター新潟病院 外科

胃癌肝転移症例の予後は不良であり、切除の意義は未だ確立されておらず手術適応には慎重な判断を要する。胃癌肝転移同時切除74例を対象に臨床的な意義につき検討した。

【結果】R0切除53例、R1切除21例の5生率はそれぞれ18.7%で、14.3%であった($p=0.09$)。前者を多変量解析したところ、単発肝転移(HR: 2.232, 95% CI: 1.036-4.808, $p=0.04$)が独立した予後予測因子であった。単発肝転移に対するR0切除症例の5生率は27.2%で、多発肝転移例およびR1切除例と比較し有意に予後良好であった($p=0.04$)。

【結論】単発肝転移胃癌例ではR0切除により予後の改善が期待できる。